
渚の出来事

聖騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

渚の出来事

【コード】

N0027V

【作者名】

聖騎士

【あらすじ】

「義理チヨコ」シリーズ第3弾。大野貴雅くんと加藤香穂さんのその後です。「海の日」ということで、衝動的に書いてしまいました。

(前書き)

衝動的に書いてしまいましたw

「義理チョコ」シリーズ第3弾です。

青い海に白い砂浜、カラフルな貝殻に打ち寄せる白いさざ波。そんな海はこの国じゃ沖繩ぐらいにしかないんじゃないかと思う。茶色い砂に黒い海。曇った空に潮の香りは生臭く、波打ち際には時折足にぬらぬらとした昆布がまとわりつく。少し歩けばタバコの吸い殻やお菓子の袋が足の裏を刺激する。そんな地元の海。

「タカ」

枕にしていた浮き輪から頭を上げ、顔に掛けていたタオルを持ち上げる。眩しい光に目を細めると、白く透き通った肌に細かい砂がこびりついた脛が視界に入る。

「なんだよ」

「いつしよに遊ぼうよ」

僕は今、香穂と海に來ている。海水浴にはまだ少し早い時期だけれど、連日の猛暑でけっこうな人出だ。

「僕はもういいよ、ここで休んでる」

「もう、寝てばっか」

そう言いつつも、香穂は時間を惜しむかのように白く碎ける波頭へ向かって走り去る。薄緑色のビキニに包まれた形のいいおしりが、白い半透明のパレオで包まれている。そのゆらゆら揺れる白いレース地の布を見て、妖精みたいだなと思ってしまったのは誰にも言えない。

香穂はよほど海が好きらしく、來てからずっと水に浸かっている。泳いでいるわけではない。香穂は、水泳はさほど上手くない。胸ぐらの深さのところまで歩いて行って、定期的にやってくる波を「うわああ」とかいいながらジャンプして避けているだけだ。何がそんなに面白いのか全然わからない。始めこそ付き合っていたしよに遊んでやっていたけど、十分もすると寒くなつて上がってしまった。いいかげんにしないと、あいつは唇が紫色になるまで浸かっているか

もしれない。

香穂と付き合いだして四ヶ月。僕たちはそれなりに楽しく毎日を過ごしている。でもそろそろ何か進展があってもいいかななんて思ったりもする。まだ手をつなぐくらいしかしてないし。

「タカ」

香穂が手を振っている。僕も小さく振り返す。こうして見ると香穂のレベルはかなり高いと思う。身長が高いだだけでも十分周囲の目を引くの、胸は大きいし顔も整ってるし。

こういう場合僕にはもつたないって思うのが普通なんだろうけど、そうは思わない。香穂は僕を選んでくれたし、僕も香穂のことは好きだ。面と向かってちゃんと言ったことはないけど、僕の気持ちは伝わってると思う。お互い運動部でなかなかいっしょに遊びに行く時間もないけど、たまに休みが合った時はこうして出かけたりしてるし。

結局大事なのは気持ちで見た目じゃない。そんな当たり前のことでも、僕の周りじゃなかなか気づけないヤツも多い。

「あれ」

沖に浮かぶ船を眺めていたら、いつの間にか香穂のことを見失ってしまった。同じような水着が多いし、結構たくさんの方が海に浮かんでる。

するとさっきの場所より少し沖の海面に、香穂の頭を発見する。

「あいつあんなとこまで」

あの辺は急に海底が落ち込んで、潮の流れも速い。僕は香穂を呼び戻そうとレジャーシートから立ち上がる。直後、大きな波が香穂の小さな頭を飲み込む。

「香穂」

僕はタオルを投げ捨て走り出す。波が通り過ぎた後、香穂の姿は海面になかった。

「くそ」

僕は波を蹴立てて海に走り込む。脇の子どもに水がかかってしま

うが、そんなの構っていられない。脱ぐ暇もなかったＴシャツが水に濡れて重くなる。僕は夢中で足を動かし両手で水を掻く。

「香穂」

肩が完全に水に浸かってしまう。かなり深い。僕は香穂のいた辺りにたどり着くが、香穂はどこにも見当たらない。

「香穂」

大声で叫ぶと、目の前に香穂が飛び出してきた。

「ばあ」

「な、おま」

「えへへ、びつくりした」

香穂は薄茶色の前髪から水を滴らせ、満面の笑みを浮かべている。僕は頭に来るより先に、思わず抱きしめていた。

「え、あ、タ、タカ」

「バカ、びつくりさせんなよ」

冷たい水の中、香穂の素肌はほんのりと温かい。

「ごめん」

香穂の顎が僕の右肩に刺さって痛かった。

レジャーシートまで戻り、Ｔシャツを脱いでからバスタオルで身体を拭く。水を吸ったＴシャツは重くなっている。

「ごめんね、Ｔシャツびしょびしょだね」

香穂は首を傾けて髪を拭いている。女の子って髪を濡らすのを嫌う子も多いけど、香穂はまったく気にしない。

「お前唇紫色になってんじゃん」

「うん、けっこう寒いかも」

小学生かよ。

「ねえ」

「あ」

Ｔシャツを搾りながら香穂を見る。水に濡れた白い鎖骨に銀のチェーンがきらきら光っている。

「なんで怒んないの」

僕を騙したことを言ってるのだらう。確かにかなり焦ったし、取り乱して恥ずかしい思いもした。帰り際、水をかけた子ども母親らしき女の人に睨まれたし。

でも何だか腹が立つより先に、香穂が無事だって安心する気持ちの方が先に立った。

「怒ってほしいのか」

「そうじゃないけど」

「なんだよ」

香穂は僕の隣に来て腰を下ろす。左肩に触れる香穂の柔らかい肩が心地いい。

「お前こそ、ほんとに溺れてたらどうするつもりだったんだよ」

「大丈夫だよ」

「お前そんなに泳ぎ得意じゃなかっただろ」

「タカが来てくれるもん」

「はあ」

思わず眉根に力が入ってしまう。

「タカはあたしのこと、ずっと見ててくれるもん」

「お前なあ」

よくそんなラブコメみたいな恥ずかしいこと言えるな。

「あたしもずっと見てるもん」

左肩に載せられた香穂の頭が生臭い。僕はバスタオルを香穂にもかけてやる。

「ずっといつしよだもん」

香穂が僕を見上げてくる。気がつくとは僕は香穂とキスしていた。周りのことなんか気にならない。気にしない。香穂の唇は冷たくて、でもとても柔らかかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0027v/>

渚の出来事

2011年8月19日03時27分発行